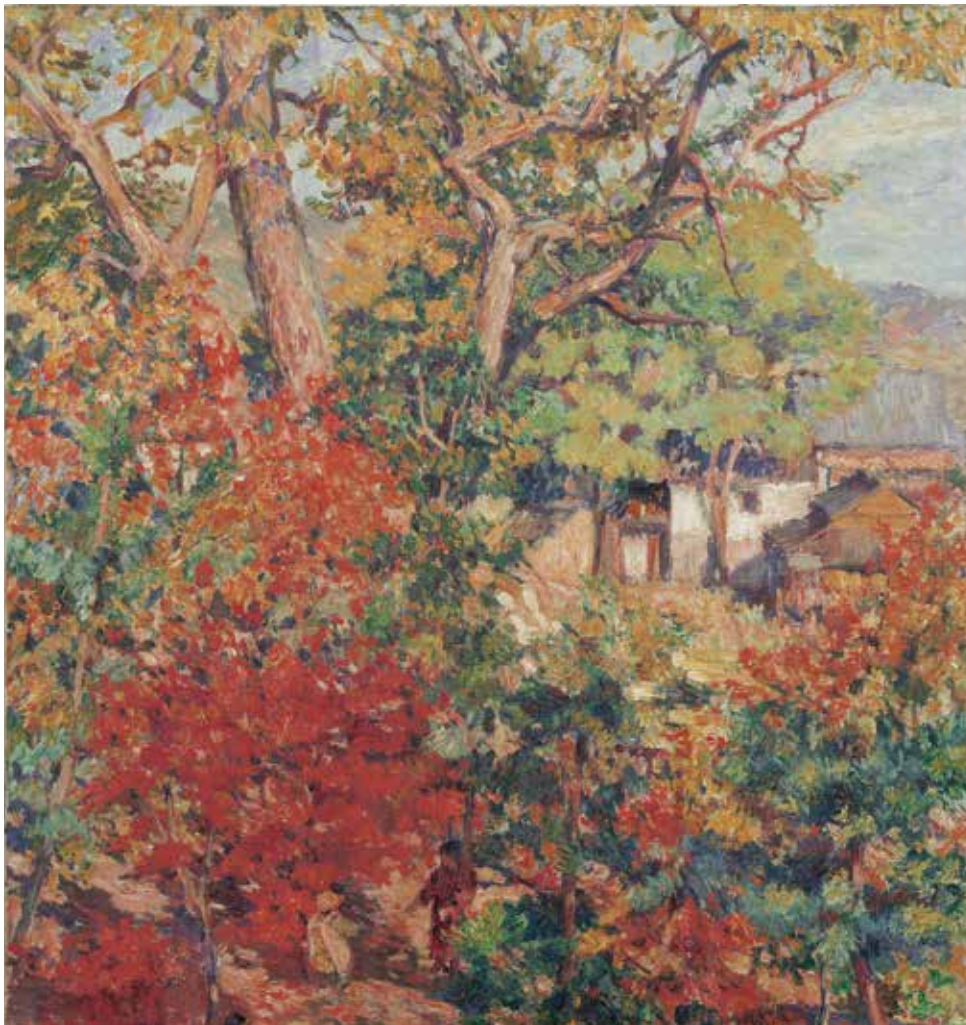


NARIWA MUSEUM

高梁市成羽美術館 だより

NO.34◆2018.3

編集・発行：高梁市成羽美術館
〒716-0111 岡山県高梁市成羽町下原1068-3
TEL 0866-42-4455 FAX 0866-42-4451
<https://nariwa-museum.or.jp/>



児島 虎次郎

《酒津の秋》

1915-17年頃 油彩・キャンバス 高梁市成羽美術館 新収蔵

ここに響くことばと書にんげんだもの 相田みつを展
2017年4月15日「土」～6月25日「日」



会場風景

5年前、東日本大震災の翌年に相田みつを展を開催して以来2回目の展覧会であり、この度は、今まであまり紹介されなかった書家としての相田みつををより深く知っていたただく内容としました。ここに響くことばで多くの人に感動を与えている詩人相田みつをは、その67年の生涯を文字どおり筆一本で純粹に生きた書家でもありました。

展示は、相田みつをが世に知られるきっかけになった本『にんげんだもの』（文化出版局刊）所収の作品を中心に、相田みつをの原点をさぐる構成としました。また、本をプロデュースし相田みつをを広く世間に紹介する契機を作った松本瑠樹氏コレクションをはじめ20代の代表的書作品や美しいろうけつ染めのつい立、屏風、軸装作品など東京の相田みつを美術館から外へ出たことの無い珍しい作品が数々出品されました。まさに相田みつをの全貌を俯瞰できる展覧会であったと思います。

会場で、お客様が作品の前に佇みながら一つひとつと静かに語り合うかのようにご覧になる姿は、他の展覧会とは一味違った静寂の中での沈思の趣がありました。また開催前は、中高年齢層の方々のご来館を予想していましたが、始まって日を追うごとに中高年だけでなく学生の方をはじめとした若い方々の多さに驚かされました。このように世代を問わず多くの方々にご覧いただけたことは、わかりやすく素朴な言葉を使い「だれにでも読める書」という相田みつをの意志

を体現したかのようなでした。悩み多き、正解がない現代を生きる人々へ、相田みつを作品の数々は、ときにやさしく、そして力強く心へ響いたことでしょう。

展覧会関連イベントとして、会期中に相田みつを美術館館長 相田一人氏により「夢はでっかく根はふかく」父 相田みつをの夢と人生」という演題で講演会が開催され、隣接する成羽総合福祉センターのホール一杯の聴衆を前に90分間



展覧会初日には、相田みつを美術館館長 相田一人氏(右)によるギャラリートーク並びにサイン会を開催しました。



6月4日(日) 記念講演会
『練達した線と余白の美～相田みつを 書の魅力～』
島谷弘幸氏(九州国立博物館 館長)

熱弁を振るわれました。作品映像を見ながらの解説をはじめ、子息ならではの体験にもとづくエピソードの披露もあり、相田みつをの人間像により深い理解が得られる機会でありました。

また、書家としての相田みつをの紹介では、九州国立博物館館長であり現在わが国における書評の第一人者である島谷弘幸氏を講師に迎え「練達した線と余白の美」相田みつを 書の魅力」の演題で、美術館内レクチャールームにおいて講演会を開催しました。わが国の書の歴史を概観しながら、相田みつをがなぜあのような書体を生み出したのか、相田みつをの書の魅力をわかり易く丁寧にお話しいただきました。会場に溢れんばかりの約90名のお客様が熱心に聴き入っておられました。

この度の展覧会では、日を追うごとにお客様が増えていき最終日には期間中で最高の客数となりました。会期中の入館者数16,995人は当館歴代3位であり、大変ありがたいことではあります。反面美術館の施設面やサービスマンでの課題がクローズアップされました。これからあらためてお客様視点に立ち課題の一つひとつに真摯に向き合いながら全員でハード面、ソフト面の改善に努めてまいりたいと思います。



安藤忠雄建築とティラノサウルスという異色のコラボレーションは迫力満点!

高梁川流域連携中枢都市圏事業 ティラノが成羽にやってきた!

2017年7月8日[土]～9月3日[日]

成羽にティラノサウルスが来た日

2017年7月4日、成羽美術館の搬入人口に巨大なクレートがいくつも運び込まれました。その中身は、全長12mにもなる巨大肉食恐竜「ティラノサウルス」。成羽に初めてティラノサウルスが、足を踏み入れた「日」です。

昨年夏の企画展「ティラノが成羽にやってきた!」化石は太古の生き物図鑑」は、倉敷市立自然史博物館が林原自然科学博物館から譲り受けた化石コレクションを、成羽美術館が借用して実現した展示です。ティラノサウルスを筆頭に、約6億年の生命史を語るに十分な化石

標本が公開され、その結果、当初の予想をはるかに超える2万人近い来館者が訪れてくれました。成羽美術館の最多入館者記録にせまる、大人気企画となったのです。

なぜ成羽で恐竜なのか

ご存知の通り成羽地域は世界的に有名な植物化石の産地ですが、一方で同時代の恐竜など動物化石が産出したことはなく、高梁市と恐竜に強い関連性はありません。ではなぜ今回恐竜の企画展を実施することになったのでしょうか。確かに、ティラノサウルスは普遍的に人気のある標本です。しかし成羽美術館がこの展示を企画したのはそれだけが理由ではなく、「成羽の化石をもっと広く知ってもらいたい」、「岡山の人々に化石という地球の遺産を感じてほしい」という意図があったからです。

成羽地域から植物化石が産出することは周辺にお住いの方は知っているかと思いますが、残念ながら、まだまだ広く知られていないといえず、さらに学術的に大変価値のある化石であることまでは、なかなか伝わりきれていないのが現状です。なぜなら、植物化石の貴重さはある程度「古生物学」に素養のある人でないと理解が難しいうえ、標本自体も植物の生きている様子を一般の方が想像するには部分的すぎてわかりづらいからです。

このちよつとハードルの高い植物化石をよく見てもいい、知ってもらうためにはどうするべきか。その答えがティラノサウルスでした。化石になじみのない方でもティラノサウルスの名前を聞いた

ことがない人はいないでしょう。そのくらい有名な、地球史上最大級の肉食生物の標本が成羽にくる。それだけで人々はわくわくするでしょう。そしてこの標本を入口として、化石という未知の世界に人々に触れてもらいたいというコンセプトで本展示は企画されたのです。

幅広い年齢層が来館

もちろんティラノサウルスだけではなく、地球史のなかで私たちの想像が及ばないような不思議な生き物たちの化石もたくさん展示されました。こんな動物がかつて地球にいたのか、と驚く来館者の声がかさかして聞こえたのは、企画者冥利につきます。このような、いわばわかりやすい化石達を堪能したあと、満を持して成羽の植物化石が登場です。思惑通り、いつもよりしっかりとご覧いただいた、という手ごたえがありました。

さらに喜ばしいことは、ふだんはあまり来館されない幼稚園児から小学生の子どもとそのご両親といったファミリー層がたくさん美術館に来てくださったこと。きっとその日の夕食は、ティラノサウルスや成羽の化石の話題で盛り上がったことでしょう。

将来に向けて

成羽の森は、現在の広葉樹が生える森とはまったくちがいが、高さ10mを超すような巨大ツクシや巨大シダの木が乱立する不思議な世界でした。さらに日本最古の森の化石でもあり、また新種だらけの貴重な化石群でもあります。高梁市民に、岡山県民に、素晴らしい「宝」が地元にあることをもっともっと知っていただくために、今後さまざまな企画を実施していきたいと考えています。

成羽美術館化石アドバイザー 碓京子

元林原自然科学博物館学芸員「ティラノが成羽にやってきた!」化石は太古の生き物図鑑」企画協力



成羽化石産地見学会(採集体験)
開催日 8月19日(土)

成羽地域では2億年以上昔の植物化石が多く発見されています。見学会では、実際に化石含有層を見ながら太古の様子を地層から学びました。倉敷市立自然史博物館の学芸員の方を迎え、講師を務めていただきました。マツの祖先・ボドザミテスやシダの仲間のクラドブレビス等が多く見つかりました。



ワークショップ
「ティラノサウルスを描こう!」
開催日 8月5日(土)

本展示の目玉であるティラノサウルスを使って、ワークショップ「ティラノサウルスを描こう!」を開催しました。今回のワークショップは、ただ目の前のティラノサウルスを描くのではなく、研究者の眼になってじっくり観察し、ケッチするというもの。約30名の参加があり、みなさん真剣に取り組んでいました。



ミュージアムグッズ発売記念イベント
「NARIWA FLORA with D」
開催日 7月15日(土)

岡山県立大学の学生たちが本展のためにデザインした恐竜・化石グッズの発表と学芸員によるギャラリートークを行いました。スタイリッシュなリケラトプスのTシャツや、可愛らしくデフォルメされたティラノサウルスのトートバッグなど、様々な工夫を凝らした商品が店頭に並びました。



オープニングスペシャルトーク
「恐竜博士もやってきた!」
開催日 7月8日(土)

初日は、岡山理科大学生物地球学部教授 石垣 忍さんをお招きして、オープニングスペシャルトークを行いました。化石発掘現場での体験談や、展示されている化石についてお話しいただきました。知られざる太古の世界に、参加者は興味深そうに耳を傾けていました。



青木繁《二人の少女》1909年
笠間日動美術館蔵
児島とは東京美術学校時代同級生

児島虎次郎作品新収蔵記念 近代日本洋画の歩み—山岡コレクションとともに

2017年9月16日「土」～11月26日「日」

「児島虎次郎のふるさとである成羽の美術館で末永く展覧されることが画家にとっても地域の方々にとっても望ましく、喜ばれるのではないか。」との所蔵者のご意向を受けて2017年の春、高梁市成羽美術館に児島虎次郎作品11点が新たに収蔵されました。これらは、児島の転機となったヨーロッパ留学から晩年までの優品がそろっており、色彩画家として活躍した画業をより深く伝えられる作品群です。そこで秋の特別展では、日本の印象派を牽引した児島作品の新収蔵を記念して、近代日本における西洋画の受容とその展開をたどる展覧会を開催しました。

幕末から明治にかけて、近代化とともに本格的に流入してきた西洋絵画は、その逼真的な表現で多くの画家達を魅了しました。彼らはこぞって新しい技法の習得に励み、やがて国内外で学んだ者たちが日本の美術界に新風を吹き込みます。展覧会では、ヤンマーディーゼル創業者である山岡孫吉(1888-1962)によるコレクションから日本洋画史をひも解く上で重要な高橋

由一、黒田清輝、青木繁らの名品を紹介。さらに児島と交流したクロード・モネ、ピエール・ボナール、熊谷守一らの優品76点を展覧し、洋画界を彩った画家たちの歩みをたどりました。

会場には、明治期の美術教育に関する教科書等の資料を特別陳列し、記念講演会では我が国の図画教育の展開と画家たちの制作を織り交ぜて、岡山大学の赤木里香子教授にご講演いただきました。(以下講演要旨)

「洋画を学んだ人々—西洋絵画との出会い」 赤木里香子

洋画とは、英訳すればウェスタン・スタイル・ペインティング、西洋絵画の様式(スタイル)に則り、その技法・技術や材料・用具で描くことを指す言葉です。本展覧会の登場人物や岡山出身者は、どのように洋画を学んだのでしょうか。

安土桃山時代に始まった日本人の洋画学習は江戸時代の鎖国により一時途絶え、洋風画の試みを経て幕末に再開されます。1853(嘉永6)年のペリー来航を契機に幕府が設立した、洋書の読解による西洋文明の研究機関で、川上寛(冬崖)や弟子の高橋由一らが洋画研究に取り組みしました。ものの形を正確に描き出す技術の習得は、文明開化に不可欠と考えられたのです。



松原三五郎著『小学鍊画帖』(中央手前)など
赤木教授所蔵の明治期の教科書を展示

開国後は来日した西洋人に学ぶチャンスもありました。イギリス人報道画家チャールズ・ワーグマンのもとには、1865(慶応元)年に当時10歳の五姓田義松が、翌年には高橋由一が弟子入りし、水彩画や油絵に挑戦しました。義松の父、五姓田芳柳は、床に寝かせた紙や絹に日本の伝統的画材を使用して描いた世代ですが、人物像に陰影を施し立体感を表そうとしており、洋画への強い関心がうかがえます。

明治維新後、川上寛はイギリスで出版された技法書を翻訳し、1871(明治4)年に文部省から『西画(せいが)指南(しなん)』として発行しました。同書は1872(明治5)年から始まった学校教育で使用され、その後も西洋の手本集を引き写した鉛筆画用の教科書の刊行が続きました。これらの教科書は点と点を結んだ線の練習を最初に掲げ、手本の図を体系的に並べ、透視図法の解説にも踏み込ん



講演会後には、赤木教授(右)に解説いただきながら会場を巡りました(11月12日)

だ点で、江戸時代の絵手本とは大きく異なり、地方の人々が洋画に初めて触れる機会をつくりました。

明治初期、川上寛や高橋由一はじめ洋画の先駆者たちが開いた画塾に人々が集まり始めます。五姓田親子の塾の弟子たちは、芳柳のように日本の画材による洋画的な技法を身につける一方、義松のように舶来の鉛筆や水彩、コンテによる写生に励み、油絵も練習しました。義松の妹は岡山の矢掛出身の渡辺文三郎と結婚し渡辺幽香と名乗り、夫婦で画家として活躍し塾を支えました。備前岡山藩の御典医の息子、松原三五郎もここで学びました。

旧制岡山中学校で洋画に接し憧れを抱いた松原が、1880(明治13)年に上京して最初に入学を希望したのは、工部省という官庁が1876(明治9)年に創設した工部美術学校でした。同校ではイタリアから招かれた画家フォンタネージと

彫刻家ラギーザのもと本格的に西洋美術を学べました。高橋由一がフォンタネージの指導を受け、リアルな鮭の絵を描いたのもこの頃です。しかし松原は、同校が廃止されるとの噂を聞き、画塾に入ることにします。噂は1883(明治16)年に現実となりました。財政難や国粹主義の台頭による美術行政の方向転換が背景にあったようです。

工部美術学校に学んだ小山正太郎、浅井忠らは洋画家団体を結成するなど、活発な活動を続けます。彼らの作成した教科書は鉛筆の普及と相まって幅広く使用され、洋画の普及に大きく貢献しました。松原は小山の活躍に刺激され、1884(明治17)年に帰郷して岡山師範学校の図画教師となり、画塾「天彩学舎」を開いて後進を育てました。

この頃、成羽を訪れた松原は、幼い児島虎次郎が自分の作成した教科書『小学錬画帖』を巧みに写していることを知り、彼の画才を確信しました。1890(明治23)年に高等小学校に入学した児島に鉛筆画を教えたのも松原の門下生で、当時としては珍しく、写生を重視した指導だったようです。

児島は上京して小山の画塾「不同舎」に学んだ後、1902(明治35)年に東京美術学校に入学しました。同級の山本鼎が大正時代に自由画教育を提唱したように、この時代の洋画家たちは西洋絵画の新たな動向を知り、自分が見て感じたことから派生した多様な表現を試していきます。このような変化と明治期を通じた洋画学習の蓄積がどうつながるのか、今後も検討が必要でしょう。

岡山大学大学院教育学研究科
教授 赤木里香子

4年ぶりに

ミュージアムコンサートを開催

今展会期中には、ベルギー留学時代に西洋文化への理解を深めようとバイオリンを習っていた児島虎次郎に因み、ミュージアムコンサートも開催しました。美術・音楽は常に時代の映し鏡として共にあります。今回は、着席スタイルに限定することなく、演奏中も観覧会場をご自由に巡っていただけるよう来場者に促しました。今から100年以上前に奏でられていたであろうバッハやモーツァルトなど、地元岡山を拠点とする新進気鋭のユニット「アンサンブル・ジャガー」の皆さんに演奏いただきました。安藤忠雄氏設計による成羽美術館の特異な建築空間での一時を、コンサートマスターの長坂拓己さん(写真左端)に振り返っていただきました。



ミュージアムコンサートの様子(10月15日)
松崎国生さん(左から2番目)作曲の曲目披露も。
会場は心地よい旋律に包まれました。

「虎とジャガーの出会い」

長坂拓己

私達アンサンブル・ジャガーは昨年の10月に成羽美術館にて初めて演奏をさせていただきました。音を出して初めての最初の感想は、良くも悪くもこの空間では音がどこまでも抜けて行く、そういった印象でした。というのも、美術館の作り上、一箇所を出した音はほぼ全てのフロアに鳴ってしまうからです。しかし成羽美術館は我々に、この音響を逆手に取り、絵画を観覧している全ての人に音と絵で楽しんでもらうというユーモラスな企画を提案してくださりました。この愉快的提案に我々は通常のアンサンブルの形のみならず、お客様を四方から取り囲み演奏するという演奏形態を試みました。遠くに離れて演奏をするということは我々にとってもリスクはありましたが、結果として空間に鳴る音で皆様を包み込めたように思います。現実形として残る絵画という芸術と、出したらあとは減衰して消えて行く音楽という芸術との融合は非常に興味深いものでした。そして、今は亡き児島『虎』次郎と、また産声をあげたばかりのアンサンブル『ジャガー』を引き合わせて下さった成羽美術館に深く感謝をしたいと思っています。

アンサンブル・ジャガー 代表 長坂拓己



表紙作品解説

児島虎次郎《酒津の秋》

1915年〜1917年頃
油彩・キャンバス



朱に色づく葉波と緑のコントラストが美しい、季節はまさに秋。ある晴れた日のまるで絵のような情景を画家は描かずにはいられなかったでしょう。

5年間のヨーロッパ留学を終えて1912年に帰国した児島は、翌年大原孫三郎の媒酌により、岡山孤児院を運営する石井十次の娘友と結婚、倉敷酒津の大原家別邸「無為村荘」に暮らすこととなります。児島は、四季折々の表情をみせる風情豊かな酒津を愛し、多くの秀作を残しました。本作は紅葉に彩られた庭園を、点描を駆使した丁寧な筆致で鮮やかに描き出しています。この頃の作品に度々登場するのが画面左下に遊ぶエプロンの子供達。豊穣、爽りの季節の到来を喜ぶとともに子等の健やかな営みを愛でる画家の優しいまなざしが感じられます。

児島虎次郎を偲ぶ絵画展

2018年1月6日(土)～2月4日(日)



【ポスター】高梁小1年西村海音さんの作品
《かこにたまがいつはいらはらった》

平成29年度の「児島虎次郎を偲ぶ絵画展」は、高梁市内小中学校21校から1,275点の応募がありました。審査を経て、各学年で最も優れた作品である「児島賞」、次点にあたる「渡辺賞」などの受賞作品を含む252点を多目的展示室にて展示しました。

1月17日に表彰式を開催し、受賞者には高梁市教育委員会 小田教育長より賞状と記念品が贈られました。洋画家森下修三氏より各作品の講評があり、出品者は熱心に聴き入っていました。
また、児島賞・渡辺賞18点は、成羽美術館で展



宇治小4年 妹尾行乃さんの作品
《ブドウをつむ瞬間》

示したのち、高梁市図書館にて巡回展示も行い、多くの方々にご覧いただきました。
児島賞・渡辺賞受賞者は次のとおりです。
(敬称略、学年は受賞時)

【児島賞】

西村海音(高梁小1年)、藤野新汰(中井小2年)、大森結菜(松原小3年)、妹尾行乃(宇治小4年)、森下翔太(松原小5年)、丸橋昇馬(落合小6年)、平松篤樹(成羽中1年)、藤村菜々子(高梁北中2年)、横山亮輔(高梁北中3年)

【渡辺賞】

為永悠真(成羽小1年)、眞野菜奈(落合小2年)、妹尾吉乃(宇治小3年)、谷村彩夏(松原小4年)、宮田萌恵(松原小5年)、江草匠(富家小6年)、藤村柊香(高梁北中1年)、西井真緒(高梁中2年)、松尾真珠(成羽中3年)

財団運営にご尽力いただいた故・渡辺醇造氏(前理事長)のご家族より、平成29年度に渡辺賞基金への寄付がありました。本事業の更なる発展に役立てさせていただきます。

※渡辺賞とは…平成12年秋「山陽新聞賞」を受賞された渡辺醇造氏からの寄付金によって、平成13年度より、各学年1点の児島賞に次ぐ賞として設けられました。

ミュージアムショップより おすすめ商品のご案内

美術館1階のミュージアムショップでは、所蔵品関連グッズから高梁市ならではの当地グッズまで各種ご用意しています。当館へお越しの際は、ぜひご利用くださいませ。

■吹屋の紅たるま／600円(税込)

高梁市成羽町吹屋で地元食材を使用した辛味調味料を製造している佐藤紅商店さんの看板商品。赤唐辛子と柚子皮を



たっぷり使用した赤色の柚子胡椒で、程よい塩味と柚子の風味が強いのが特徴です。地元のレシピで保存料・化学調味料を使わず、無添加でシンプルな素材を使っているので安心して召し上がりいただけます。

■備中弁手拭い／600円(税込)

備中地域・成羽地域で使われている方言「備中弁」をあしらった手拭い。色々な世代の人、色々な地域の人がこの手拭いによって、おもしろおかしくコミュニケーション

ションを楽しむんでくれるように、という思いを込めて、一枚一枚、丁寧に手作業で製作されています。成羽へ来た記念のお土産にいかがでしょうか？ 方言の内容がすべて異なる3種類をご用意しています。

■安藤忠雄関連グッズ

成羽美術館は、世界的建築家安藤忠雄氏による設計です。「安藤建築」を目当てに、アジアを中心に海外からのお客様も多数ご来館いただいています。ミュージアムショップでは、関連書籍をはじめ、安藤氏によるデッサン画をモチーフとした、当館オリジナルのポストカードやメモパッドを販売しています。また現在、当館の建築的見どころを紹介するパンフレットも製作中です。完成をぜひお楽しみに！

